



高島藤樹会

(題字は、竹脇曇卿先生によるものです)

発行
NPO法人 高島藤樹会

〒520-1224
滋賀県高島市安曇川町上小川225-1
藤樹書院・良知館内
電話・FAX 0740(32)4156
<http://takashima-tojukai.com/>

藤樹先生との出会い・学び

高島藤樹会理事 藤原浩之



今から十七年前、安曇川中学校では藤樹ウォークという取組を行っていました。

藤樹ウォークとは、藤樹先生の紙芝居等でもよく知られる話である、馬方又左衛門が加賀の飛脚の忘れた大金を約三十キロも離れた榎の宿(現在 大津市和邇)まで届けたというルートを、南から北に向かって歩くものです。これほどの距離を困っている人のために忘れ物を届け、お礼すら断ったという行動の基礎となつている藤樹先生の教えを学んだことが、私と藤樹先生との出会いであつたと思います。

その取組も数年でなくなり、藤樹先生の教え「五事を正す」「致良知」等の言葉は目にして、その先を深く考えることもなくなりました。

昨年、縁あつて高島藤樹会の理事にというお話しをいただき、とても自分のようなものに務まるとは思えませんでした。安曇川町に長い間お世話になつたご縁を感じ、お引き受けしました。

まずは、藤樹先生のことを知り学ぶことからだと思ひ、四月から日程が合う月は藤樹人間学塾に参加しま

した。そこで学ぶ「孝」の思想は奥深く、簡単に理解が深まるものではない。ただ、現在のいるんな世界の情勢が耳に入るたび、藤樹先生ならどのように考え、私たちに示唆を与えていただけるのだろうと考えるようになりました。いろいろと想像するよりも、先生の教えの源を少しでも知ることからだと考え、中江藤樹『翁問答』現代語訳の本を購入しました。読んでみると、時代背景は現在と異なるものの、大変参考になることや今のいろいろな立場の方々には是非参考にしていただきたいことがありました。

まず、自分の認識不足を痛感したのは冒頭の部分でした。

『われわれ人間の体には、「至徳要道」(最も重要な道である至高の徳)と呼ぶ天下無双の霊妙な宝が備わっている。その宝を活かし、心に誓つたことをよく守り、忠実に実行するのを基本と心がけること』を基本に、『至徳要道』という至宝を分かりやすく教え示すために、「孝」と名づけた。』とあり、親に仕えることだけが「孝」ではなく、孔子が「天道は、孝という徳を備え、神妙不測にして広大深遠な存在で、始まりも終わりもない」と『孝経』という書物に記したように、「孝」とはもつと広く大きいものであるということを知り、自分の知識は何と浅はかであつたと思ひ知りました。

『聖人の心は、いわゆる「良背敵應にして意必固我がないものである。つまり、あらゆることに無私無欲で柔軟に対応し、自分の意見を押し通したり強調しようとする私心というものがないから、富貴貧賤とか死生禍福といったことや、それ以外の世の中の全てのことや、大小高低、清濁美醜といった点に対して、好き嫌いで選り分けようとする心情が全くなく、全身全霊に一貫しているのは「皇極の神理」だけである』

『たとえ主君が嫌う物事であつても、主君のため、国のため、家中のためによいことなら、主君を上手に諫めて主君が実行できるようへと導き、たとえ主君が好きで気に入っている物事でも、それが悪いことなら必ずやめさせるようにならなく、諫め、そうすることが主君の気だてや身の持ちように適うだけでなく道にも適い、国が富み豊かになつて末永く栄えるようにと一心に念じながら、自分自身がどうなるかと少しも顧みない。』

コロナ禍や不安定な世界情勢、藤樹先生なら「あらゆる角度からの研究を進めたデータを正確に分析し、落ち着いて考えなさい」と話される気がします。そして、ここに挙げた二つの内容を、それぞれの立場の人に丁寧の説かれるに違いないと思ひます。藤樹先生の教えが世の中に浸透していくことを願うばかりです。

ひじりの声 上田 藤市郎

過ぎ去った日々を振り返り、来たるべき未来に夢や希望を思い描くことで、日々の生活が確かなものとなるのだが、かつてとは大きく異なり、世相の変化が速すぎてしかもあまりにも鮮明に見えすぎる時代に生きることになっている。インターネットの影響はいうまでもないが、私たち自身の「感性」が大きく変化してしまっているのではないかと思われる。戦争、残酷な殺人や児童虐待、金銭収奪を強要する組織、収賄を隠ぺいする国会議員、人権侵害を続ける国家、抑止できない地球温暖化など、課題が多すぎて、私たちは事象を冷静に判断する思考時間を奪われてしまっている。私たちは、どんな些末な事象に対しても、少なくとも、「是非」を明確にして行動したのである。しかし、情報の洪水がそれを許さない。つまり、画面に流れるテロップを見つめるだけの、判断しない人間となってしまうている。同情したり、憤慨したりする心の動きが鈍くなっている、迫り来る地球の危機にも無頓着になりつつある。情報の量と速度にふりまわされずに、その質と意義を吟味して、自分自身が得心する判断を下して行動するようにしたい。「無理が通れば道理引っ込む」の譬を黙認せず、澄んだ眼で、生きる知恵を探り当てながら日々を送りたいものである。

「大洲の旅」に参加して

高島藤樹会理事 今城克啓

中江藤樹先生が大洲藩に在籍されていた約四百年前から、高島市と大洲市は、文化・教育・産業などの交流が続ぎ、強い絆で結ばれていると聞いていました。

このため、その交流のメイン行事となつていきます「大洲の旅」には、いつかは参加したいという憧れのよくな気持ちを抱いてきましたが、このたび「大洲の旅」がようやく再開され、初めての参加を叶えることができました。

絶好の行楽日和に恵まれて出発した琵琶湖の風景は、普段にも増して美しく見え、心を洗われる旅がすでに始まっている実感が湧いてきました。バスの運転とガイドの方のお話も心地良く、長い道のりではありましたが、快適に道中の風景を楽しみながら、愛媛県伊予郡の坂村真民記念館に到着することができました。

記念館では、毎日午前三時に座禅をされ、妻への恩返しへの想いで詩を書き続けられた坂村真民先生の生きた方に頭が下がるとともに、樺（ブナ）を愛でる詩も書かれていたことが嬉しく、高島のブナの森を改めて思いました。

さらに西へ旅を続け、ようやく大洲に到着した最初の夜は、大洲藤樹会の久保田会長はじめ五名の役員の方からの温かい歓迎に、旅情とも相

まって感動しました。会員の方々によるバンドと歌の披露もあった楽しい交流会は忘れられない夜になりました。

二日目は、大洲藤樹会の三名の役員の方が、藤樹先生ゆかりの地を中心に、朝から夕方まで大洲市を案内してくださいました。大洲市巡りでは、藤樹先生にまつわる史跡の多さに驚き、江戸時代の雰囲気の色濃く感じました。

また、大洲小学校と青柳小学校の校訓が同じ「良知に生きる」であることや、教育委員会の中大洲藤樹会が置かれていること、さらには大洲高校での教育も藤樹先生と深くつながっていると聞いて、藤樹先生の教えが現在進行形で教育に生きていることを知りました。大洲藤樹会の方々には、普通の旅行では聞けない奥深いお話をいただき、多くの史跡をご案内いただいたことに深く感謝しています。

二日目になると、ご参加の皆様とさらに打ち解けることができ、懇親会などで一層人間関係が深まったと思います。



至徳堂（藤樹先生の居宅跡）前で

帰路についた三日目は、藤樹先生の一弟子、熊沢蕃山が藩主の池田公に学問を教え、池田公が建てられた、岡山県備前市の「旧閑谷学校」を見学しました。

国宝の史跡ではありますが、中では中学生が授業を受けていました。このような本物の木造の建物と静かな環境で学ぶ機会は、現代では特に貴重なものだと思います。

充実したすべての行程を終えて無事高島に帰り、「大洲の旅」は大成功に終わりました。

大変な段取りをされ、これだけの充実した旅をやり抜かれた田中会長には、改めて頭が下がるばかりです。また、この三日間の旅で、ご参加の皆様の心配りや行いに接し、藤樹先生の「孝」を生きた形で学ぶことができました。

この旅でいただきました大洲市のつながりも、ご参加の皆様とのつながりも、これから一層大切にしてきたいと思えます。

「大洲の旅」でお世話になりました大洲藤樹会の皆様や田中会長そしてご参加された皆様、本当にありがとうございました。



大洲城の前にて

藤樹人間学塾： 藤樹思想を学び考え実践する

塾長 田中 清行

「藤樹人間学塾」では、藤樹先生の著書を中心に思想を学ぶとともに、時事問題と組み合わせることで議論しながら考えを深め、日々の生活の場で実践することを目的に毎月開催しています。本稿ではその模様をお伝えいたします。

■ 九月、第百二十九回人間学塾の参加者は七名の参加でした。

● テキスト

中江藤樹著『鑑草』の第三巻序、第一話、第二話

● 今日のポイント

嫉妬するのは自己中心的で、嫉妬を超越するのは利他の心があるとも考えられる。利他を実践された稲盛和夫氏の言葉から全員で考える。

● フリートークキング

・「私なら夫が浮気をしたらその理由を話し合っただけ原因を掴み、対処する。稲盛さんの話は真理で素晴らしい」

・「男が相手の男に嫉妬することもあり、また仕事上での嫉妬もある。他方で嫉妬される場合もある。いろいろなことを考えられて有意義だった」

■ 十月、第百三十回人間学塾の参

加者は大阪、京都から参加の方を入れて十名でした。

● テキスト

中江藤樹著『鑑草』の第三巻の第三話、第四話、第五話。

● 今日のポイント

・徳による政治は、洋の東西を問わず国民から広く深く支持され長く続く。

・嫉妬は三毒（貪瞋痴）の瞋（怒り）の一つで危ない性格。がんばって相手の幸福を喜ぶようにするしかない。

● フリートークキング

・「ヨガの研究で三毒により身体が病気になることが科学的に証明されつつある」

・「人は何のために生まれてきたのか。半ばは自分の幸せのために、半ばは他人の幸せのために、



を目指している」

・『鑑草』は、『中庸解』と全く違うが「人を見て法を説く」藤樹先生の思考の深さに感銘を受けた」塾の後、場所を変えて六人で楽しい懇親会を行いました。

■ 十一月、第百三十一回人間学塾の参加者は大阪からの参加の方を入れて八名でした。

● テキスト

中江藤樹著『鑑草』の第三巻の第六話、第八話。

● 今日のポイント

・嫉妬も怒り。他の良いところを認めたくない気持ち。怒りが生じると喜びを失う。

・怒りをなくすには、「私が怒っている」ではなく「私に怒りがある」というように、怒りを客観視する。

・天地いっばいに生かされているご恩返しとして、精一杯のことをしよう。

● フリートークキング

・「日本人の農耕民族の良さが近年の個人主義の高まりによって壊されるのを危惧する」

・「自分を客観視することや同事は難しいが挑戦する意味があるし挑戦したい」

■ 十二月、百三十二回人間学塾は大阪、京都からの参加の方を入れて五名でした。

● テキスト

中江藤樹著『鑑草』の第三巻不嫉妬毒報の第九話、総評

● 今日のポイント

・怒りが生まれた瞬間、からだに猛毒が入ってしまう。怒る人は病気になるって治らない。怒りが生まれたら、怒りがある自分を観察すると怒りが収まる。

・見返りも期待せず、ボランティアで他人を助けることに、時間やエネルギーを費やす人たちに、ストレスや憂鬱に苦しむ率が高まるかに少ないらしい。したがって長寿を得られる。

● フリートークキング

・「怒りを収める方法としては深呼吸することは知っていたが、新しい気づきがあった」

・「見返りを期待せずボランティアをするという話は、中桐万里子さんのテイク・アンド・ギブの話とつながった」

等の意見をいただきました。ありがとうございます。

人間学に関心のある方は是非お越しください。

藤樹人間学塾 今後の予定

一月四日（土）、三月四日（土）、

四月八日（土）、五月十三日（土）

■ 時間（原則） 十五時～十七時

■ 場所（原則） 安曇川公民館

中江藤樹・心のセミナーから

吉田公平先生の講演内容（後編）

『今、藤樹先生の教えをどう活かすか』

さて中江藤樹さんの生きた日本には、神道・仏教・儒教の三教がありました。藤樹さんは儒教徒の立場をとりまです。儒教の特色は修己・治人の二焦点論にあります。修己とは性善説を基礎にして人格を陶冶して、悪の世界から開放される事。救われること。治人とは社会の一員として政治的役割を果たす事。藤樹さんは武士をやめたので、治人（人を治める）には積極的関心を示していません。専ら修己が主題です。



藤樹さんは朱子学に生きる力の源泉を求めましたが、学ぶ中で疑問を覚え、陽明学に触発され、晩年は独自の藤樹学を發明したというのが通説です。此の事自体に異論はありません。

ちよつと気になることを三つ述べます。一つは村井弦斎さんが『近江聖人』で述べられていることです。お母さんが冬の寒い時に水仕事をし、アカギレになることを憂慮して、帰省するときにアカギレ膏薬をお土産に持ち帰ったという逸話です。此の事は藤樹さんの伝記資料にはありません。村井弦斎さんのフィクションです。しかし、この逸話は藤樹さんが親孝行であることを強く訴える上では抜群の宣伝効果を発揮しました。今は、村井弦斎さんがこの逸話を持ち込んだ歴史的意味を考える事が肝心です。暖房がなく水道が普及していなかった時代には、この「アカギレ膏薬」の逸話は広く共感を呼びました。

もう一つ注意していただきたいことがあります。中江藤樹の思想を王陽明の言説で理解しないことです。藤樹さんは王陽明の恩恵を受けましたが、鶴呑みにはしませんでした。子細にみますと、王陽明とは異なる主張が少なくありません。その一つが知行合一説です。朱子学では知が先、

行があと。知は軽く行は重いと、知と行を先後軽重に分けて説きます。王陽明は知と行は人間存在の有り様を便宜的に分けて説明するけれども、実体としては「分けられない」という意味で「合一」と述べました。朱子学の知行論は経験的に分かりやすい。王陽明の知行合一論は説明が拙くて誤解されやすい。藤樹さんはこの知行論は棚上げして論じていません。むしろ意味とか価値こそを問題にして、知行論の深みにはまることを忌避したのです。

第三には、性善説の問題です。朱子学も陽明学も性善説に立脚して論述を展開しています。晩年の藤樹さんは性善説ではなくして、性善悪混然説を取ります。朱子が『孟子集注』告子篇で告子の主張を漢代の楊雄の混然説であると弾劾した指摘に藤樹さんは啓発されたのでしょうか。性善説ですと人間悪は後天的な作業ということになりません。しかし、世間を見ると悪が後天的な作業であるということは納得できない。人間には悪行をしないでかす根本の原因が生まれながらの本性に先天的に、善性と共に同居しているのではないのか。楊雄の混然説を藤樹さんは採択したことになりました。人間の様態の複雑さを考えたとき、この混然説は了解しやすいい。それでは潜在する悪をいかに対

処するか。意志の力で、善の根を養生しながら、片や悪の根は根のままに潜在状態に押し込めて顕在化させなければよいと。この工夫を誠意説といいます。意を誠にすると。この誠意説は藤樹さんの独創です。朱子学も陽明学も、本体は善なのですが、現場で作用すると、身体的要因に引き吊られ、社会の刺戟や誘惑に打ち負かされて、悪を結果させてしまふと。ですからもつぱら作用（はたらき）の現場で悪に対処することになります。この点は朱子が最も苦勞した課題でした。藤樹さんは、既に悪が結果した後に対処しても手遅れではないのか、と疑問を持ちました。「良く生きる」ことを主題にして生きた藤樹さんらしい疑問です。人間に付きまとう悪のしつこさを、単に後天的なもののみならず、悪の根は誰でもが先天的に持ち合わせていると、性善悪混然説を主張し、その悪の根を潜在のままに押し込める「意を誠にする」誠意説を主張したのである。人間の姿を見つめると、これだけ人が悪い事をしてしまうのは、その原因はその人自身にあるのだということです。明晰な説明だと思えます。

本性論、人間の生きる力の源泉は何か、ということについて、藤樹さんから少し離れてお話しします。私

より十歳くらい若い女性の友人がいます。東大で英文学を学んだ人です。この女性が「女性に母性は無い」というのです。母性というのは子供が生まれて育てていく間で培うものであり、生まれながらにしてあるものではないと。だから培うチャンスに恵まれない人は児童虐待に陥ってしまうわけです。児童虐待を母性の有無で非難するのは不適切であると。本性論の落とし穴ですね。性善説は生きる勇気を与えます。

藤樹さんの次の世代の人に盤珪永琢という臨済宗のお坊さんがいます。播州生まれの人です。この人は「不生禪」を唱えました。仏性は生後に育てなくとも、誰もが生まれながらに持ち合わせており、ありのまままで仏性にあふれているのです、という提唱です。この盤珪永琢さんの提唱を聴いて、特に差別されていた人達は、今のままで私も救われるのですね、と歓喜の涙を流しました。性善説の場合も同様の論法です。

悪の問題を個人的にあるいは社会的にどのように理解し対処したらいいのか、複雑な問題ですから、一概に言えないのですが、藤樹さんは一つの提案をしたわけです。

藤樹さんが門人に与えた書簡については先に述べましたが、門人の人達の質問には身につまされることが



あります。上役に嫌いな宴会に誘われた時にはどのように対処したらよいかとか。少年の性欲の苦悩とか。それに一一丁寧な返辞を書いていきます。但し、書簡に出て来る用語は同時代の中国の王陽明や王龍溪などが使用したものが多用されています。それは、今の日本人の言語感覚で読んでは本意をくみ取れないのです。一例を挙げます。「退屈する」という言葉がしばしば使われています。今は「暇を持てあます」という意味に用いられますが、退屈の二字をよく見て下さい。「退き屈する」という意味です。直面している課題を放棄して安逸さに逃げる、という意味です。藤樹さんは「退屈するな」と

しばしば門人に叱咤激励しています。宿題から逃げるな。課題を過小評価して自分が放棄しても事態はさして変化しないと勝手に決め込んで無視したり、課題を過大評価して自分にはとても担いきれないとみて逃避するということはしないで、それぞれに目前の事実を冷静に判断して、自分のやるべきことなら、ここまでやれると考えて、初めから課題から逃げるなど。今でもこの考えは生きていると思います。

知識や技術は生き延びるために不可欠です。それを身に付けるのが学習です。しかし、身に付けている知識や技術を改めて問い直すことも大事です。それを学問と言います。学びて問う。学問は学者だけがするのはありません。生活者こそが良く生きるために問い直す事が肝心なのです。

私たちが、日々生きる、より良く生きるためには、学習と学問を実施するわけですから、持て余す暇など無いのです。今は情報化社会です。与えられる情報を鵜呑みにしないで、賢く選択することが大事です。私たちはそれとは気づかず学習と学問を日常生活の現場で実践していることになりません。

小生は、認知症にならない限り、正常な判断ができる間は、「退屈は

しない」で死ぬまで人間らしく生きてゆきたいと思えます。他者と折り合いをつけながら生きていくためには、心の学び藤樹塾というのが鍵になると思えます。人間らしく生きることを目指して切磋琢磨するのが「こころの学校」です。身に付けている知識や技術が自分達がより良く生きるために本当に適切なのかどうか、これは一人一人問い直さなければなりません。そのような生き方を他者と共に生きたいというのが藤樹さんの精神ですね。

今日の話はあちこちと飛びましたためにお聴き苦しいこともあったか思います。また機会がありましたら参ります。その時を楽しみにして、今日の話は終わります。ご清聴ありがとうございました。(終わり)

昨年六月十一日に開催しました「中江藤樹心のセミナー」で、吉田公平先生にご講演いただきました。その講演内容を淵田豊明副会長によって文章化され、前号と今号に分けて掲載しました。

お知らせ

次号(5月号)から、新しく吉田公平先生にコラムを連載していただくことになりました。お楽しみにしてお待ちください。

中学生

藤樹先生を学ぶ

高島中学校で、九月三十日に全校自然体験活動が実施されました。その取組の目的の中に、高島市内の地域の特色や課題に気付き、自然環境保全などの意識を高めることを挙げ、藤樹記念館、藤樹書院を訪れました。武田基裕参与や上田藤市郎さんの話を聞き、藤樹先生についての学びを深められました。

この学習を通しての生徒たちの感想やその時の様子を紹介します。

7年(中1) 藤田 実優

私は、藤樹先生のことについて話を聞いて、藤樹先生は日頃の行いが正しく、思いやりのある人だったのだと思いました。藤樹先生は、武士



になるための勉強をしていたのに、そこを抜け出し、お母さんの所へ葉を届けに戻った話が印象的でした。それでも、藤樹先生はお咎めを受けなかったそうです。それほどすごい人で、人から愛された人だったのだと感じました。私も日頃の行いを正しくして、思いやりのある人になりたいと思います。

8年(中2) 野田 華稟

小学生の頃に勉強をして、藤樹先生のことには少し知っていました。が、今回お話を聞いて藤樹先生の人柄や、人間として生きていくために必要な教えを改めて分かったような気がしました。講師の先生からとても貴重なお話を聞くことができ、良かったです。歩いているときはしんどかったです。知らないことを知ることができました。

8年(中2) 斎藤 隼

藤樹先生のように、人として尊敬されるようなことはまだできないかもしれないけれど、せめて自分で自分の行いを認めることができるようになりたいと思います。藤樹先生のお話はとても勉強になりました。

8年(中2) 小谷 悠星

藤樹先生が行ってきた教えが、今までずっと受け継がれていて、藤樹

先生のすごさを実感することができました。

9年(中3) 藤田 倅菜

藤樹記念館に行つて藤樹先生について学びました。「致良知」「五事を正す」を学びました。「顔つき」「言葉づかい」「まなざし」「よく聞く」「思いやり」で、誰にでも和やかな顔で、良い言葉づかいをし、やさしい目で物事を見て、人の話をしっかり聞いて、真心を込めて思いやりの気持ちを大切にすることを学びました。

9年(中3) 南寄 さえ

藤樹先生が日本においての陽明学の開祖であることは前から知っていましたが、『五事を正す』や『致良知』の意味はあまり知りませんでした。今後は、これらの言葉を自分の生活の中に活かしてみようと思いました。

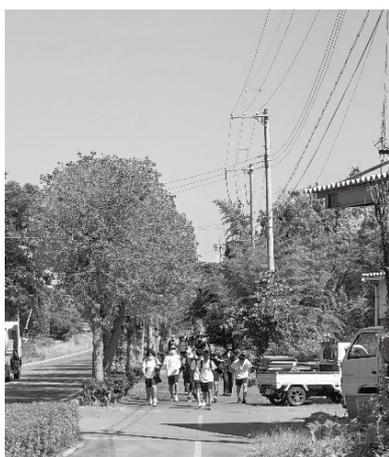
9年(中3) 佐藤 帆香

藤樹書院に行つてたくさんお話を聞いて、あらためて中江藤樹先生のことを詳しく知ることができました。また、『致良知』について理解を深めることができたので良かったです。

書院の中にあるいろいろな物には、一つ一つ意味があることにも驚きました。

9年(中3) 山本 真帆

講師の先生のお話を聞いて、皆さんが藤樹先生について伝え、後世に語り継いでいきたいと強く思つておられることが伝わってきました。藤樹書院は初めて行った場所でしたが、昔に建てられた建物でありながら、長い間守られてきたもので、とても綺麗であることに驚きました。水もとても美味しかったです。儒教式のお墓や祀るものなど、見慣れないものがたくさんあり、とても興味がわきました。



最後に生徒の皆さんが作った川柳を紹介します。

「故郷の 自然と歴史に

ふれてみた」

9年(中3) 松本 和希

「高島市 歴史めちやくちや

すごかった」

7年(中1) 澤井 杏純

「藤樹かるた」の紹介⑤

(企画広報委員会)

(かるたと解説)

め めんどうとも
思わず榎木へ 又左衛門

正直又左衛門が、お客の忘れ物の二百両を届けたお話。



み 道示す 人の生き方
「鏡草」

藤樹先生は「鏡草」の中で、さまざまな例え話を通して「孝」の大切さを説かれている。周りの人を愛し敬う心や、子どもに教える姿勢など、その内容には現在の生活にも当てはまることが多い。



し じいさんと 米子へ
旅立つ 九歳の朝

藤樹先生九歳の時のことである。米子より休みをもらって小川村へ帰って来たおじいさんは、孫の立派な成長ぶりを見てたいへん感心された。そこで「このまま田舎においておくのは惜しい。米子へ連れて行って十分勉強させてやりたい。また、私の跡を継がせたい」と両親を説き伏せて、米子へ連れて帰られた。先生が学問と武士への道を進まれる転機となった意義深い出来事である。



え 永遠に 伝える教え
「五事を正す」

藤樹先生の教えによると五事を正すとは「貌・愛敬の心を込めてやさしく和やかな顔つきで人と接しましょう。言・温かく思いやりのあることばで相手に話しかけましょう。視・愛敬の心を込めて温かいまなざしで人を見、ものを見るようにしましょう。聴・相手の話の心に心をかたむ

けてよく聞くようにしましょう。思・常に善の心、愛敬の心を持って視聴言動することを心がけましょう。」を意味する。



ひ ひとすじに 今日も独学
「四書大全」

藤樹先生は、学問を始めるにあたり、まず、中国の四書大全(大学、中庸、論語、孟子の四種の参考書)を独学で、理解できるまで何十回と繰り返し読まれた。



藤樹書院・良知館通信⑭

聖人について

藤樹書院 志村 洋

藤樹先生は今も近江聖人と崇められています。江戸時代の儒学者で聖人と呼ばれたのは先生ただ一人だという人もおられますので、聖人とはどういう人なのか考えてみたいと思います。

広辞苑は、「知識最もすぐれて万事に通達し、万人の仰いで師表とするべき人(人の師となつて手本となる人)。儒教の理想とする人物。中国で堯・舜・孔子等の称。聖者。ひじり。(用例として) 聖人に夢なし 聖人は心正しく雑念がないから夢を見ることがない。 聖人は物に凝滞(とどこおる)せず 聖人は時勢と共に推移して物事を処理するから、執着(思い込み)・拘泥(こたわり)して苦しむことがない。 聖人にまみえず 聖人は直接人に接する必要がないの意。」

儒教の理想とする人物を堯・舜・孔子等としています。夏、禹王・殷、湯王・周、文王・武王・周公も

藤樹かるた制作委員会委員

- 足立清勝・飯田典子・石黒紀代子・北川暢子・清川貞治・高谷美智子・山本義雄 (五十音順)

聖人とされているのです。堯・舜は伝説上の聖天子ですが、それ以外は古代の王なので王が儒教という聖人なのです（夏の実在には異論もあります）。孔子は王ではなく師表となつた人なので素王として王に列せられているのです。

聖人の定義・概念は歴史の流れによつて変わります。宋代（960—1278）になつて「聖人学んで至るべし（人間は学ぶことによつて聖人になることができる）」と考えるようになったのです。明代に至つて「満街の人、都べて聖人」（伝習録・王陽明の語録）となるのです。

すべての人が聖人であれば聖人として崇める人はいないはずですが、どうして先生が聖人といわれるようになったのでしょうか。

・先生は郷里で貧しい独り住まいをしている母に孝行するために大洲藩士を辞して帰郷されるのですが、その当時の先生の暮らしを伝える「藤樹先生事状」（藤樹先生全集五巻）によると「その家甚だしく貧し。麤食（貧しい食事）弊衣（敗れた衣服）。人の堪えざる所にして、これに処するに裕如なり」としています。先生は貧しさなど気にすることなく悠然としておられたのです。事状は更に「若し余粟（余つたあわ）有れ

ば必ず貧しい邑民に賑（ように）して貸す。民その返納を謹むに進物のごとし（借りたあわをたてまつるように返した）」（前同）としています。そこには貧しさ苦しさを村人と共にする先生の心の広さと、村人の先生を神のように敬う心があります。ここで注目すべきは「必ず」貸されたことです。

・医者になりたいという了佐に先生が与えられた「捷経医筌」は愚魯鈍昧といわれた了佐であっても分かりそうな箇所を、中国の医学書から撰び出されたものです。内科・外科、小児科・婦人科・精神科などの病理と処方。経脈（簡単にいえばツボ）や灸法、本草（薬草）学に及ぶ詳細なものです。そのために先生が読まれた医学書を「全集解題」で挙げていますが、数えきれないほどの医書を読まれているのです。その「捷経医筌」を了佐ただ一人のために書かれたのです。

「我（先生）了佐に於いて幾んど精根を尽くす。：我かれに教うといふとも、かれ勉めずんばあたわじ（教えることはできなかつた）。：了佐如くならざる者はその勉める所を知るべし」（年譜）と塾生にも怠らずに勉学せよと励まされるのです。そこには先生の限りなく深い愛情と同

時に厳しさがあります。

・先生は医学の知識が豊富だったので、病んだ人がいれば必ず往診し、薬草も自ら煎じて与えられ、貧しい人には診療費も受けられなかつたと思うのです。

・先生は学塾（藤樹書院）で塾生と何のこだわりもなく接し、聖人になることを夢みて、塾生と共に勉学に励まれたのです。

そうした積み重ねがあつて、先生は多くの人々から聖人として崇められたと思うのです。

賛助会員一覧

★新規賛助会員のご紹介

令和四年十二月末日までに、ご加入いただきました賛助会員をご紹介します。ご加入ありがとうございます。

○株式会社 才川食品店

（高島市安曇川町西万木）

○有限会社 丸三旅館

（高島市安曇川町西万木）

★既加入の賛助会員一覧

ご協力ありがとうございます。

○ウエストレイクホテル可以登楼

○税理士法人 淡海総合会計

○大津公証人会 白髭博文

○大溝工業 株式会社

○株式会社 大山建設

○岡本アルミ建材 株式会社

○川島酒造 株式会社

○川島織布 株式会社

○株式会社 Growls

○株式会社 桑原組

○有限会社 宏和商事

○税理士法人 小畑会計事務所

○佐治タイル 株式会社

○株式会社 澤村

○株式会社 シグマックス

○清水安三記念館

○有限会社 白浜荘

○新旭電子工業 株式会社

○杉橋建設 株式会社

○ソエダ 株式会社

○高島鋳建 株式会社

○田中マネジメント事務所

○株式会社 TADCO ポレイション

○鉄屋商事 株式会社

○寺子屋まなざし童心塾

○有限会社 天平フーズ

○株式会社 戸井薬局

○とも栄 藤樹街道本店

○株式会社 ナカサク

○ナカシヨウ 株式会社

○株式会社 中田運送

○株式会社 中村測量設計

○ニツケイ工業 株式会社

○八田建設 株式会社

○有限会社 馬場塗装

○富士包装紙器 株式会社

○戸次会計事務所

○株式会社 ホリゾン

○株式会社 ヨシダヤ

○株式会社 リンクス

○有限会社 綿庄食品店